

あの夏、夕暮れの田園で

榊原洋悟

栃木の田園の中に、私の「ばあちゃんち」があった。

母の実家であるその家には、小さい頃からよく泊まりに行っていた。

お盆とお正月に行くのが家族の恒例だったけれど、姉と弟は、思春期に入ったあたり以後の数年は来なかった。姉弟では私だけが、酒を飲む歳になっても欠かさず行っていた。

なぜか親父は、ばあちゃんちには滅多に寄り付かなかった。自分の故郷ではなく母の実家だからか、町工場の社長という小忙しい立場だったからか、理由はよくわからない。だから母ちゃんと私の二人で行くことが、あの頃の数年は続いていた。

あの夏の夕暮れどき。ばあちゃんちの庭で、小さな宴が開かれた。

じいちゃん、ばあちゃん、母ちゃん、私、そして珍しく、あの日は親父も来ていた。

むしろ、親父がいたからこそ、酒を飲み交わすにもあえて庭で、ということになったのだった。

親父は一昨年の秋に他界したが、その血をひいた私もやはり、いまなお屋外で飲むのが大好きだ。じいちゃんもばあちゃんも、あくまで親父という珍客のために、庭に宴を用意した。幼少の頃からみてきた祖父母は、だんべえ、だんべえと訛っているし、絵に描いたような農夫婦だし、割とぶつきらばうな人柄という印象だったが、ごく稀に親父が来ると、そのリクエストに応える優しさを秘めていた。梅雨を経てすっかり豊かに密生した庭の芝生をみて、親父は「俺はここで飯が食いたい」と言い出し、じいちゃんもばあちゃんも、ころよくそれに応えたのだった。

ふいに、夕立ちが訪れた。

ああ、来たか……と、私の心は小さくおどった。

どういうわけか、ばあちゃんちの夏は、夕方になると決まって、にわかにも雨が降り出す。

といっても、さーっとひと湿りすると、すぐに雨は止んでしまう。お約束のように、なぜか夏の夕暮れにはそんな時間が訪れた。

あの日もそうだった。そして夕立ちが止んだあとのお約束も、しっかりと訪れた。

山あいの田園は、文字通り水を打ったように静まり返り、西の空がゆつくりと、茜色に染まりだす。そうして間もなく、向かいの初音山から、ヒグラシの声が聴こえてくる。

カナカナカナカナ…

その儚げな声を運ぶ風は、心地よい涼しさをもって、私たちの火照った身体を優しくクールダウンしてくれる。

家の中からばあちゃんが出てきて、庭の宴席に土鍋を置いた。ドジョウの柳川鍋だ。

庭は家の前にあるのだが、その反対側、つまり家の裏には小川が流れている。水はものすごく澄んでいて、ばあちゃんはそこで米を研いだりしているし、洗濯機が普及する前は、洗濯もそこ

でしていたはずだ。私が小さかった頃は、ホタルが当たり前のように舞っていたし、あの日の宴の頃でも、サワガニやドジョウが採れたものだ。

じいちゃんは前日、親父が急に来訪するということで、小川に罟を仕掛けてドジョウを捕まえてくれていたらしい。その捕獲器はじいちゃんのお手製で、竹で組んだペットボトルのような形をしたやつだ。他にもじいちゃんは、マムシを捕まえるための道具とか、色々と自分で作っていた。じいちゃんが捕まえたマムシは、あの日も確か、日干しにしたやつを炙って食べた気がする。

ばあちゃんちではみな、日本酒を飲む。

親父はコップ酒をおりながら、柳川鍋をつついた。日中の暑さが身体から放たれ、涼やかで心地いい宴の時間だ。みんなの顔が夕陽を受け、オレンジ色に輝いていた。私はミヨウガの漬物が妙に美味く感じたので、そいつをつまみながら、くいくいと冷や酒を飲んだ。十八の夏だったが、すでに酒好きだったし、つまみにこだわるタイプでもあった。そして自然の恩恵を愛する少年だった。もちろん、いまもそれは変わらない。

初音山からしずかに寄せてくるあの風。タ立ちがもたらしてくれたあの優しくて涼しい風…。そしてなんとも儚げで、心を鎮めてくれるあのヒグラシの声の音色…。

栃木の田園の中で小さく催されたあの宴が、身内だけですごしたあのささやかな時間が、五十半ばになったいまも、私はたびたび思い出すのだ。